

12. 地頭町の子供会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新谷, 朋美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4922

12. 地頭町の子供会

新谷 朋美

- I. はじめに
- II. 子供会の組織と運営
- III. 子供会の行事と活動
- IV. 子供会の特徴
- V. おわりに

I. はじめに

義務教育を終え、あるいは高等教育を終了したのちには、就職や進学のため、それまで自分が育ってきた場所を選ぶのか、新しい場所を見付けるのか、といった様々な選択肢が待ち構えている。いわゆる再生産の段階において、ある地区に居住し、子供を生き育てていくという決断は、諸個人のライフスタイルや好む好まざるに関わらず、その地区と最低限度のつながりが求められるという意味でも重要な問題である。なぜなら、一般に小学校就学から中学校にかけての義務教育にさしかかる頃が、親としてもっとも地域との関わりあいが強くなるとされるように、子供の成長段階によって、その親と地区との関わりかたも変わっていくからである。

ここでは小学生段階の子供を持つ親達の地域との関係として、地頭町の年齢別組織の1つである子供会をとりあげる。

まずIIで組織と運営について会員、役員、財務を枠にして述べる。IIIでは実際に地頭町の子供会が行なっている行事、活動について、1997年度の内容を中心にみていくことにする。IVでは地頭町の子供会の特徴をとらえることを目的とする。そして「再生産を担う」とは、地区の成員である子を生き育て、仕事に従事して労働力を生み出すという意味だけではなく、子供を通じて、保護者として地区に関わることで自らが主体となり、地区の成員として生まれていく過程である、といった面からも捉えてみたい。

II. 子供会の組織と運営

1. 会の名称と組織

地頭町の子供会は通称「建部子供会緑の少年団」（以下「緑の少年団」と略す）といい、それぞれ以下の名で県と小学校とに登録されている¹⁾。県登録名「富来小学校地頭町緑の少年団」、学校登録名「建部子供会」である。またその保護者の組織を育成会と称している。本稿では

「緑の少年団」と育成会をあわせて、「建部子供会」と記す。

事務局は富来町立富来小学校に所在し、主に連絡窓口の役割をはたしている。富来小学校の校下全体で、建部地区（地頭町）、住吉地区（領家町）、美多気地区（高田）、金剛地区（七海、生神）、瀬木川地区（東小室）、城ヶ峰地区（大西、田中）、菅原地区（和田）の計7地区のそれぞれに子供会があり、規模にあわせて建部、住吉地区には各3名、美多気、金剛、瀬木川、城ヶ峰、菅原地区には各1名と、地区ごとに担当教諭がいる。

子供会行事に関する「お知らせ」が児童に配られたり、資源回収や空ビン回収等に参加、協力の呼び掛けがなされるのも、学校事務局を通じたかたちをとる。県緑の少年団連盟から事業計画と予算案、事業報告と決算に関する書類が届くのも事務局宛てである。

このように、児童や保護者への連絡のほか、育成会役員への要請も事務局を通じてなされることが多いのだが、連絡窓口を小学校に置くことにはいくつかのメリットがあるようだ。

ひとつには学校側が子供会の行事を把握出来るだろうこと。PTA 総会資料にはPTA 行事、学校行事と並んで、子供会関係行事の記載がある。学校管理運営計画にも各子供会・育成会の行事として、それぞれが行なう共通のもの（総会、春秋の交通安全運動、夏休み行事、ラジオ体操、歓送迎会）は記載がある。新役員決定後（3月頃）、すぐに「来年度1年分の計画案をだしてください」といわれて提出し、その中から載せられる。

ただし、このことが「年度末にいきなり来年度1年分の計画書をといわれても…」と新役員を悩ます。たいていは旧役員に相談したり、前年を参考にして提出されるが、苦心して予定を組んでも、スムーズに対応がなされるかと言えばそうではないようだ。実際に、後からPTA 行事、学校行事が入ってきて子供会の行事を別の日にずらしたこともあり、「向こう（学校）は『見てない』と言う。何のために出すのか」（役員）との声もある。PTA 行事、学校行事が子供会関係行事よりも優先的にとらえられている例ともとれる²⁾。

学校を通すことで、育成会役員が作成した文書の配布が速やか、确实ということもある。学校からの配布物となることで、通知には、子供会会長の名前と共に、PTA 会長や学校長の名前と印とが載ることになる。特に保護者に行事への関心をもってもらう、協力を呼び掛けるという、呼び掛けにハクをつけるといった面もあるようだ。

また、県緑の少年団連盟に加盟しているので、子供会の組織自体が県等と継続したつながりをもっていく必要がある。そのためにも、毎年変わる役員に対してなされる要請に、一定した窓口が求められる。構成員の入れ替わりを前提として、組織が成り立っていくうえで、他との連絡用としての「私書箱」的存在でもある。

2. 「緑の少年団」会員としての子供

小学校に入学と同時に入会し、卒業までは子供会の会員となる。富来小学校の児童は、それぞれ地区ごとにある7つの子供会のうちどれかに所属しているのだ。1997年度会員名簿による

と、建部地区の子供会「緑の少年団」の総会員数は51名で、学年別、性別の人数は表-1のようになっている。

また、地頭町では区としての24班の分け方とは別に、子供会の7つの班の分け方がある。班別の人数は表-2のとおりである。区の班のようにはっきりとした線引きは難しいが、「むかしからの分け方によったもの」で「7班めは、はまなす団地ができて、子供が増えたのにあわせてできたのだろう」という。

表-1. 「緑の少年団」学年別、性別人数
(1997年度)

学 年	男 子	女 子	計
6 年 生	3	4	7
5 年 生	5	2	7
4 年 生	2	7	9
3 年 生	5	8	13
2 年 生	6	5	11
1 年 生	1	3	4
計	22	29	51

資料：「平成9年度建部子供会会員名簿」

表-2. 「緑の少年団」班別、性別人数
(1997年度)

班	男 子	女 子	計
1 班	2	5	7
2 班	4	4	8
3 班	3	2	5
4 班	3	4	7
5 班	1	6	7
6 班	5	1	6
7 班	4	7	11
計	22	29	51

資料：表-1に同じ

各班毎に班長、副班長がいて、上の学年のものになっていく。高学年になると班の中での連絡などの役割がでてくる。行事への参加、不参加のアンケートは一旦班長のもとに集められ、班長が役員に渡すというものだ。また、会費なども班長と班長の保護者である育成委員を通じて納入される。逆に、役員からの緊急連絡はまず班長へ、それから班員へと伝達される。

「緑の少年団の活動」として募金活動や、県民みどりの祭典等に参加するのは、主に4年生以上になってからで、6年生になると、緑の少年団の団長、副団長、書記の役につく。地頭町においては子供会として「緑の活動」に力を入れていることもあって、それが通称の「建部子供会緑の少年団」に表れている。

3. 「育成会」役員

子供の小学校入学により、保護者は自動的に「育成会」員になるのだが、子供の成長段階によって関わり方が変わってくるようだ。

低学年（1、2、3年生）のうち、夏のキャンプや秋のバス旅行に子供が参加する場合は保護者の同伴、付き添いが義務付けられている。このため保護者としての参加は義務である。

但し「育成会」員として協力するというよりも、キャンプならば参加者として、テント張りやバーベキューの準備をするという程度のものであり、子供も保護者も行事を楽しめるように工夫がされている。

高学年（4、5、6年生）になるに従い、会の活動への参加の機会は増加する。子供の「緑の少年団」員としての活動が増えたり、班の中で上の学年になるに従って役割がでてくると同様に、「育成会」員にも多くの参加、協力が求められるからである。つまり、班長の保護者が各班担当の育成委員となるように、子が班長をつとめる年齢になる頃には、保護者も自動的に何らかの役を担っていくことになるのがわかる。

そして、「育成会」の中でも、企画立案から運営のほぼ全てを担うのが育成会会長、副会長、書記、会計の4役である。これは同時に、「建部子供会」の会長、副会長、書記、会計でもある。以下本稿では、主にこの4役を指して「子供会の役員」という。

「子供会の役員」の会長と副会長は、6年生の保護者から出るのが基本である。書記と会計は下の学年の児童の保護者におりることもある。全ての役の任期は1年で、同じ人が同じ役を再任することはない。だが夫婦がそれぞれ別の役を受け、結果としてある家庭が2年連続して役員を受け持つことはある。

育成会会長にあっては、同時に、協議委員としてPTA役員に組み込まれてもいるので、PTAの会合で意見を求められることもある。建部地区では子供会の会長を含めて6人が協議委員として活動する。小学校で行なわれる相撲大会では審判役を任されるといったふうに、PTA行事、学校行事への協力要請という形で、人手としてかりだされる。こうした労をねぎらってPTA総会（1997年度）では、建部、住吉、金剛の各育成会長を功労者として、PTA会長からの表彰が行なわれている。

4. 財 務

「建部子供会」の経費は、会費（年会費、主な行事ごと）、補助金（区、小学校、緑の少年団の活動）、自主活動（空ビン回収他）の3つによってまかなわれている。

会費は、年度始めに児童1人1,500円の年会費と、主な行事ごとに参加者から徴収するものがある。

補助金は、区、小学校、緑の少年団の活動からが主なものだ。区からは5万円³⁾、小学校からはPTA一般会計予算の支出の部に児童1人につき500円の枠（地区子供会補助）がある。緑の少年団の活動に関しては補助的な面と、「緑の募金活動」⁴⁾の成果に応じて次の年度に還元されるという自主活動的な面と、両方ある。前者は1997年度には7万円（1998年度からは8万円）がおりたが、内5,000円は本部へ会費として収める。残りも「補助金」と名が付くからには用途が自由というわけにはいかないのが実情で、「緑のこと」に関する活動に費やすようにとの要請があり、「子供会のこと」に使えるのは2万円に満たないとの話も聞いた。

自主活動としては、年に1、2度空ビン回収を行なっている。詳細はⅢで述べるが、例えば空ビン回収においてビール瓶1本5円の収入であっても、財務にしめる割合は大きい。また、自らの活動で収入を得て、自由に使えるという面でも、空ビン回収は子供会にとって大切な意味をもつといえる。

Ⅲ. 子供会の行事と活動

1. 地区関連

地区関連とは2つの意味でそう呼ぶことにする。ひとつは「建部子供会」が主体となり、区の中で行なう活動、行事であること、もうひとつは地頭町（建部地区）の年齢別組織の1つとしての子供会活動、行事であることである。

「建部子供会」の3大行事といえば夏のキャンプ、八朔祭礼参加、秋のバス旅行が挙げられよう。数ある行事のなかでもイベント性が高く、メンバーの期待も大きく、大変であるから、役員にとってもそれぞれが大きな山となる行事である。ただし、夏のキャンプや秋のバス旅行と、八朔祭礼とでは、異なる面が見て取れる。

夏のキャンプは荒木ヶ丘管理棟にて、参加者59名（子供36名、大人23名）で行なわれた。1泊2日を予定していたが、あいにく台風が発生しており、日帰りとなる。「テントでの宿泊を楽しみにしていた子供達には気の毒だった」との役員の言葉は、何よりも第一に安全を考えて、かつ、楽しみにしている気持ちにも応えたいという思いを反映している。秋のバス旅行は辰口丘陵公園、航空プラザ、加賀フルーツランドでの葡萄狩りといった行程で、参加者57名で行なわれた。

ともに参加費を当日あるいは事後に集金する。1997年度では、夏のキャンプで1,500円を事後に感想文と一緒に班長へ届けるようにし、秋のバス旅行は3,000円を当日集めることにしたようだが、1人当たりの出費はもっとかかっているであろう。実費を全て集金しては不満もあるし、気軽に多くの人に参加してもらうために足りない分は子供会の財務で補ったり、有志からの寄付や、児童と保護者とで参加費に差をつけるといった工夫が欠かせない。決算報告をみると、キャンプに用いる食料、飲み物、割り箸、紙コップにいたるまで地頭町の商店街で揃うものならすべて地頭町の中で揃え、各店で金額も出来るだけ偏らないようにとの気遣いがされているように思う。こうした気遣いは、地区のなかでの近所に対するものであると同時に、以下で述べる自主活動に（ひいては自主財源へと）つながる関係においても求められるのではないだろうか。

八朔祭礼には、地頭町から子供キリコは2基参加し、各地区の子供キリコの前頭に行く。2基出されるのは、青年会や婦人会などの他の年齢別組織のように、子供会も1区（寺地）と2

表-3 建部子供会の行事、活動内容（1997年度）

月	日	行事、活動（参加対象）、場所
4	6-15	春の交通安全街頭指導（保護者）、地頭町街頭
4	12	総会（会員）、福祉会館
4	13-14	緑の羽根募金活動（4年生以上）、地頭町内
4	29	緑の少年団の集い（6年生）、津幡森林公園
5	11	空ビン回収（4年生以上）、地頭町全域
5	24-25	リーダー研修会（6年生）能登青年の家、（1998年度は8月に変更された）
6	8	富来小学校資源回収協力（保護者、4年生以上）、富来小学校
7	12	建部神社清掃、祭り唄の練習（育成委員、3年生以上）、建部神社（雨天延期で8月9日に）
7	20	キリコのお披露目（3年生以上）、建部神社、町まわり
7	26-	ラジオ体操（全員）、建部神社
7	26-27	夏のキャンプ（全員）、荒木ヶ丘山村広場（台風発生のため日帰りに）
8	13-14	八朔祭礼参加（3年生以上）
8	17	空ビン回収（4年生以上）、地頭町全域
9	21-30	秋の交通安全街頭指導（保護者）、地頭町街頭
10	19	秋のバス旅行（全員）、辰口丘陵公園
10	23	緑の羽根募金活動（4年生以上）、地頭町内
10	26	石川の森づくり大会（5、6年生）コスモアイル羽咋
11	3	富来小学校資源回収協力（保護者、4年生以上）、富来小学校
3	8	資源回収、地頭町全域
3	14	歓送迎会（全員、新1年生）、ワークパル七尾

資料：「平成9年度建部子供会」事業報告、文集、役員から会員への配布物より作成

区（登出）とに分かれていて、子供の数の減少をうけて今の1つにまとめられたことの名残であろう。キリコが先頭をきることを「誇りに似た感情を抱く年配の方もいる」との話も出たが、一方で「祭り歌の練習の成果を見せる発表会のようなもの」（30歳代の保護者）としてとらえる見方もあった。子供キリコも少子化の影響からか、担ぎ手の減少に悩まされている。その不足を補うために、かつては禁止されていた女の子でも担ぐようになった。なおかつ3年生にまで参加年齢を下げている。単純に考えてもキリコの重さは人足が減ればその分だけ増すであろうし、深夜まで続けられ、2日にわたって繰り広げられる祭りは「たいそうやし、嫌だ」（「疲れるから嫌だ」の意）と言うのが本音かもしれない。参加は強制ではないが、自主的ともいいがたい様子である。ことに保護者に関しては、祭りの参加アンケートで「付き添えます」、「付き添えません」の項目を設けても否ばかりで、結局は役員と役員経験者の中からようやく付添いを決定する状況であるという。これは「参加のかたち」の変化が一因と考えられる。

祭り唄の練習が「行事」として行なわれることに、「参加のかたち」の変化の一側面を見て取ることができよう。キリコが2基新調された1997年度では、区の主催でキリコのお披露目が行なわれることになり、子供会に参加の要請がきた。お披露目では、建部神社において神事が執り行なわれたあとに「町まわり」をするため、当日までに祭り唄の練習をしておく必要があった。また、祭り唄の練習は八朔祭礼本番のためにも行なわれる。ラジオ体操や建部神社の清掃の後などの時間を利用してする。このようにわざわざ練習の機会を設けなくては、子供は祭り唄を知らないままなのだという。

裏を返してみると、祭り唄が特別な練習を必要とせずに済むというのは、伝え手と受手の双方に緊密な関係が構築され、かつ日常として伝承の可能な状況であろう。例えば祭りに愛着をもつ祖父（60歳代）と父（30歳代）から、話と共に唄を聞かされ、祭りそのものを実際に（またはビデオで）見る機会も多く育ったと思われる子供である。未就学児ではあったが、彼は唄を「知っていた」し、祭り独特の掛け声に合いの手を入れることが出来て筆者を驚かせた。同時にこれは現在の地頭町においては、むしろ特殊な例かもしれないとの印象も強かった。転入者の割合をみても、親の世代が祭り歌を知らない状況が広がっていることを想像するのは難くない。

けれども「祭り唄なんて自然に覚えた」、「上のもんが下のもんを集めて教えたものだった」（60歳代、男性）というように、かつては家の中や地域の中で伝えられてきたものだったことは感じとれる。小学校で配られる「正しい」祭り唄の書かれた用紙を見て、役員の呼び掛けで集まり、練習をするという機会が必要になるのも、こういった自然発生的な伝承の機会の減少と切り離しては考えられないであろう。

建部神社の清掃は、八朔祭礼が近づく頃に欠かせないものである。鎌で草を刈って祭りの日までにきれいにするために、3年生以上の子供と育成委員（班長の保護者）に呼び掛けて行なうのだが、雨で出来ないこともある。空ビン回収は、八朔祭礼の行なわれた週末の土曜日か日曜日に合わせて行なうことが多い。祭りでは酒やビールの消費が増え、各家庭で空きビンが沢山出るからだという。祭りとは直接関係はないのだが、同時期にすることで意味がある活動といえる。但し、建部神社の清掃も空ビン回収も、年に2、3回かそれ以上行なうこともあり、回数は多い方が良いのだが、協力の呼び掛けに対しての反応がよくないといった共通の悩みを抱えているため、実行が難しいようだ。

その他に、子供会内部の総会と歓送迎会がある。総会では新役員、緑の少年団の団長、副団長、書記、各班長と育成委員、新会員の紹介が行なわれる。写真を撮るなど会員同士の顔合わせを目的としている。歓送迎会では、夏休みのラジオ体操の皆勤者に名前入りの楯を渡す表彰式や、卒業生、新入生、新役員の紹介、ゲーム、おかしや下じき、文集等のプレゼントがある。バスか自家用車どちらかに乗って、まず石川県七尾美術館へ行き、絵本原画展や映画観賞をし

た後で、徒歩数分の距離にあるワークパル七尾へ移動して行なわれた。新入生を含む子供38名に保護者10名の計48名が参加した。参加費は保護者の観覧料のみ（一般600円、中学生以下無料）であった。

2. 緑の少年団連盟

活動は主に4年生以上の緑の少年団によるもので、団長、副団長、または班長が責任者となり、班員を整列させるなど指揮をとる。役員は引率者となる。

春と秋には緑の羽根の募金活動を4、5、6年生が行なっている。春にはとぎストア前（団員8名、役員1名）、Aコープ前（団員8名、役員1名）、アスク前（団員7名、役員2名）の3ヶ所にわかれて、日曜日だった13日は午前11時から、月曜の14日は午後4時半から約1時間半の間「緑化募金」と書かれた箱を持ち募金活動を行なった。秋にはトギ電子前（団員11名、役員2名）、越和工業前（団員12名、役員2名）の2ヶ所にて同様に行なった。

第14回県民みどりの祭典⁵⁾には6年生が参加し、役員2名が引率した。県民みどりの祭典とは、津幡森林公園にて行なわれる県庁の森林管理課主催のイベントであり、みどりの日の行事として一般参加自由なために親子連れで賑わう。緑の少年団の制服を着用して役場前に集合して、バスにて移動して緑のふれあいコーナーやチャレンジコーナーなどで、例えば押し花などを県庁職員の「森林インストラクター」に教わり、楽しみながらみどりに親しむことがねらいだ。

石川の森づくり大会には5、6年生が参加し、役員3名が引率した。緑の少年団羽咋ブロックより参加依頼を受け、緑の少年団の制服を着用して、羽咋市コスモアイル羽咋にてクロマツ、タブの木、ケヤキ等の植樹を行なった。

3. 学校関連

資源回収は役場から小学校に対して「やったらどうか」と声がかかり、ノルマを満たせば補助金がおきるものだ。補助金は小学校の児童全体のために使われ、例えば楽器の購入といった費用にあてられる。学校から、高学年児童と、1年生から6年生までの全ての保護者に参加、協力が呼び掛けられる。指定された土曜か日曜の、どちらか都合の良い日を選んで、「地区ごとに」行なうようにと要請される。

しかし、小学校での「地区のこと」イコール「建部のこと」となると、その責任は子供会へ、そして役員へと回ってくる。軽トラックやワゴン車を用意して地頭町の地区を回り、各家庭前に出ている古新聞や古雑誌を収集するのは、協力精神のある一部の限られたひとと、PTAや子供会の役員の仕事になるのが現実のようである。

4. 公民館関連

第25回石川県子供根上大会には5年生6年生と、役員2人、社会教育課3人が付き添いとして参加した。富来町の中央公民館より参加の依頼があり、社会教育福祉会館に集合して根上町

へ移動、総合文化会館ホールタントで全体会（開会式）があった。その後に翠ヶ丘運動公園でディスクゴルフに参加した。

他に、6年生を対象としたリーダー研修会が1泊2日程度で行なわれることもある。

5. その他

年に2回、春と秋とに交通安全街頭指導が行なわれる。春秋の交通安全週間にあわせて、通学路を中心に朝の通学の時間帯に育成会員が順番で立ち、安全指導を行なう。危険と思われる場所については派出所と相談することもあり、1997年度では、能登信用金庫前、大橋前、シャディ前、まつだ酒店前、舟元床屋前、ミキオート前の6箇所の主な交差点で実施された。当番は、子供会の各家庭39戸に必ず1回まわってくるようにということで、6箇所で7日間の計42回分を（不足分は役員が複数回やるように）割り振って、育成会員同士で都合を付けて交替するような方法をとった。次の当番へ腕章、エプロン、帽子を届けるのも各自の責任で行なわれている。

ラジオ体操も、ラジオをかけて参加者に出席のはんこをついたり、次の順番の人までラジオを届けたりする当番は、育成会員で回り持ちをしている。夏休みの間行なわれるラジオ体操は、日曜日とお盆（8月13日から17日まで）が休みで、計21日を2人ずつ当番にしている。

年度始めの第2回役員会（4月3日）では、年間行事についての話し合いが予定され、委員会（4月7日）では、育成委員とPTAの協議委員を集めて、年間計画報告を兼ねた懇親会が計画されている。共に第2クラブを会場にして、懇親会では1,000円の会費で役員手作りの夕食で小宴を、という慎ましくも心を込めた親睦を深める努力がなされている。

IV. 子供会の特徴

Ⅲでは、建部子供会の行事、活動を1997年度の活動内容を中心にながめてきた。以下にいくつかの特徴が挙げられよう。

まず何よりも、地区とのつながりの強さである。建部子供会が主体となり区の中で行なう活動、行事であること、地頭町（建部地区）の年齢別組織の1つとしての子供会活動、行事であること、この2つを満たすものを地区関連とするのならば、すべての行事、活動が、広義においてこれにあてはまる面がある。自主活動とはいえ、募金や空ビン回収は地域の協力がなくては成り立たないのは言うまでもなく、活動場所や、緑の少年団で地区外の催物に参加するときの集合場所ひとつをとっても、おなじことがいえるからだ。

もちろん、こうした緊密なつながりは、お互いの関係のなかで絶え間なく構築していくものである。区の中での役割を果たして、はじめて主体として認められる。この主体性と役割との相補的なバランスを活動、行事を通じて感じた。3大行事でいうならば、夏のキャンプや秋の

バス旅行と、八朔祭礼とでは、異なる面が見て取れるのだが、夏のキャンプや秋のバス旅行も会員のためのレジャー的要素が強い。総会、歓送迎会も楽しみを兼ねた親睦会である。一方、区主催の行事へ参加したり、補助金を受けることで、暗黙に了解事項となっている区の要請に応えるものがある。キリコのお披露目や八朔祭礼の参加、建部神社の清掃等がそうだ。地区とのつながりの強さは、組織の主体性と地区の協力とを得て活動、行事をスムーズに行なうための問題となる。

次に、小学校とのつながりである。義務教育、つまり、年齢が達したら誰もが参加し、特別な事情無しには抜けることがないという自動的で、ある程度の強制力をもった加入は、構成員の入れ替わりを前提として組織が成り立っていく基盤を保証している。しかし、組織への加入と実際の活動への参加との間には隔たりがあり、役員や一部の人にまかせっきりになりがちな現状があるようだ。「地区のこと」として子供会に責任を求める姿勢と、PTA 行事、学校行事が子供会関係行事よりも優先的にとらえられている面が浮き彫りにされた例をみてみよう。

1998年度の活動では、公民館からの要請をうけて6年生を対象としたリーダー研修会が能登青年の家で行なわれた。これまでの5月から、8月に研修会が変更されたために、予定していた夏のキャンプと重なってしまった。その前に既に日程まで決めていたところへ、PTA の山登り行事が重なり、1週間後にずらしたばかりだという。しかも年度始めに1年分の計画案を提出していたにもかかわらず、PTA の行事は後から重なるのを承知で決めてしまった。調整に時間が掛かったのだが、「重なるならそれでいい」とする建部子供会に対して、困ってしまったのはPTA・学校側のほうだった。児童の多数を占める建部地区の不参加は行事に大きく影響するであろうが、子供にとってはどちらを選ぶのも選ばないのも自由である。参加人数よりも問題となったのは、実は、安全面だったという。地頭町の子供が参加する場合、PTA・学校側は、建部地区の協議委員あるいは高学年の保護者を引率者として予定していたであろう。建部地区の子供会の行事と重なるということは、役員の不在を意味するのであり、それでは建部地区の子供の安全を見守るといふ責任をどこにおくのかという問題が生じるためであった。

富来小学校の児童というよりも、より細分化した各地区ごとの児童として把握し、その保護者として把握する。行事に限らず、PTA 役員の選出であっても同じである。富来小学校校下全体から会長、副会長、書記、会計以下すべての役員を決めようとはしない。例えば、ある年にPTA 会長を金剛地区から、副会長は住吉地区と城ヶ峰地区から選んだとすると、次年度は建部地区からPTA 会長を選ばなくてはならないという具合に、各地区の持ち回りで決められていくのだ。このように小学校での「地区のこと」イコール「建部のこと」となると、その責任は子供会へ、育成会へ、そして役員へとスライドされる図式を見て取ることが出来る。こうして役員は、次の子供会役員への引継ぎばかりか、PTA 役員の引継ぎにも心を砕くのである。

そもそも年度始めに1年分の計画案を提出していたにもかかわらず起きてしまったことであ

るため、通知や連絡を学校を通じて行なうことで学校側に行事があることを把握してもらう意味をなしているのかは疑問である。役員によれば、「学校に見せるため。学校側は『知らなかった』ではいかん」としながらも、「通知は単なる親睦か、保険の意味もある」と、形式的手続きが必要以上に重視されることを嘆きつつも達観しているようだ。

安易な先例踏襲に陥りやすいといった形骸化の弊害が、かえってこれまで活動、行事の変化（とくに衰退）を防いできたともいえる。建部子供会は他の他の地区の子供会と比較して規模も大きい、行事、活動も多く、組織もしっかりしている。名簿や文集が毎年発行されているのも他の地区にはみられないことである。もしも前年度の行事を減らしたのならば、「誰が役員の時に何の行事がなかった」という話題は避けられない。したがって役員は自らの名誉のため、せめて「前年と同じだけのことはやりたい」、「誰の代で（行事を）やめたといわれたくない」と望むのだという。こういった地区とのつながりの強さが変化（衰退）の防波堤になってきたのだが、この特性は、ともすると育成会から役員への敷居を高くして役員の負担を増やし、また育成会の役員（主体性）離れを増幅するという悪循環を助長している側面を抱えているともいえる。

活動、行事のなかでも楽しみに関することは参加率が高い。参加者人数から見てもなかなかのものであるといえる。「子供が喜ぶもの」、「皆が楽しめるもの」との工夫がなされている。何より「子供たちは勉強以外はみんな大好きなものだ」（50歳代、男性）から、低学年のうちは子供が行きたがれば付き添いとして参加しなくてはならない。その反対に、「たいそう（辛い、大変）なこと」は、子供の参加も自主性が薄れてしまう。育成会員としての参加であっても「単なる参加から、主体的な参加へ」となると、やはり役員か一部の人に限られてくるようである。

筆者は1998年8月13日-14日の八朔祭礼と、同年8月16日の空ビン回収を見学させてもらった。そこでとても印象に残ったことがある。地区の他の行事にはあまり積極的ではないとコメントしていた40歳代の男性と、夫婦そろってさまざまに役を引き受けるなど地区のために力を尽くしている40歳代の男性とが、2人して同じように額に汗しながら子供キリコに付き添う姿を見たのである。本調査の聞きとりの際には、祭りや地区に対しての想いには正反対ともいえるものを語り口から受けた2人であった。共通項を探すならば、子供が同じ年頃で役員経験があること、会社勤めではないことである。

子供会に限ったことではないが、役員を断る理由に「仕事」というのがあり、調査で多く耳にした。「時間が自由にならない」ことが問題になるなら実状を観察したくなり、日曜日の午前9時から行なわれる空ビン回収に足を運んだのはそのためもあったのだが、しかし、役員か役員経験者という、知った顔にしか逢うことが出来なかった。役員を引き受けた人にどうして子供会の役員を引き受けたのか、という問いをかけると「地域とか故郷とか祭りへの愛着はと

もかくとして、子供への愛着、愛情は保護者に差がないのでは、「自分の子が世話になっている。無視はできん」(30歳代、女性)との言葉がかえってきた。

小学校とのつながりのなかで、「地区のこと」イコール「建部のこと」となると子供会へ、育成会へ、そして役員へと責任がスライドされる図式を指摘したが、PTA 役員や子供会の役員引継ぎの困難さは、役員だけでなく育成会が負うべきものであろう。役員の仕事は単純明瞭とはいかないまでも、普通の才覚ある人なら誰でも容易にその責務の遂行をなしうるはずだと、育成会に少しでも関わるならば気が付くはずである。なぜなら基本は保護者としての子供への愛着、愛情でも十分であり、もし足りないところがあるならば補うだけの相互扶助の精神があることを、筆者でさえ感じることが出来るからである。新年度の役員を決めるのに、6年生の保護者のなかでくじ引きをしたという話も聞いた。役員への垣根が、実際にはどの育成会員にとってもそう高くはないことを、この噂は示してはいないだろうか。まずは単なる保護者から、一步、育成会としての自覚を、そして育成会の問題として、リーダーとなる役員の在り方、選出、行事への取り組みを期待したい。

V. お わ り に

本稿においては、保護者として子供会に関わっていくことのなかに、再生産を担う世代が地区との関係を構築していく過程をみてきた。子をもたない場合や、既に子供会会員の保護者の年齢よりも上であるなど、ライフサイクルのどの時点のことなのかによっても状況は異なるため、必ずしも網羅は出来ていないし、目的ともしていない。しかし、早くは中学校卒業後、高校を卒業したらほとんどが地頭町を離れて就職、進学の道を選ぶ現状にあって、いわゆるUターン、Jターン、Iターンや転入の促進だけでは、本当の意味での地域活性化にはつながらない。こうした転入者を、地区との関わりをなかに活力となる構成員として再統合していくことが、地頭町が地区としてのまとまりをもつために不可欠であることは間違いない。そのきっかけ、いわば1つの入り口として、子供会は位置するのではないだろうか。「小学校のPTAと子供会の役員は地域との密着性が高い分大変だ」との言葉も、裏をかえせば地区との関わり合いの機会の多さを表したものだ。

さまざまな行事、活動のなかでも、八朔祭礼への参加は、地頭町(建部地区)の年齢別組織の1つとしての子供会であることを具現化し、象徴したものであるように思われる。だが、会員である児童や保護者にとっては、建部子供会の行事、活動のすべてが「地区の会員であることの表明」という側面を帯びるものである。こうして、求められる役割をはたして主体となり、認められ、協力を得て活動するなかで、また新しい、別の役割をうけていく。地区との強い関係はこうして生まれるものであろう。そして、組織も人であり、地区もまた人であるのだから、

子供会の一員として、地区の一員として、関係を構築し、織り成し、主体性を得ていくのは個々の人でもあるということだ。役割の放棄は主体性の自己否定と同義ではあるまいか。

ライフサイクルが多彩で可能性に満ちた変化をとげるのは、子供として、保護者として、それぞれの過程のサイクルが重層的に存在し機能しているということにある。親は子を生み育てるのだとすれば、子によって親は地域の成員として生まれ、育つ機会を得ているともいえる。地区に関わることで主体となり、地区の成員として生まれていく過程とは、子と共に地域に生まれ育つ、自らの再生産の過程でもあるのだ。

注

- 1) 「緑の少年団」とは、「県緑の少年団連盟」に加盟、登録をしている組織の名称。石川県内に47団(1999年1月)存在している。たいてい1つの小学校単位で、校下の児童を1団として登録がされている。建部子供会は、緑の少年団羽咋ブロックに所属。財団法人石川県緑化推進委員会が「県緑の少年団連盟」をとりまとめており、制服、帽子等を貸し出したり、「緑の募金活動」の要請をおこなっている。
- 2) ただし校務分掌組織図では同列扱いで列挙されている。
- 3) 1992年度の補助金の予算額は3万円であった。1993年1月20日地頭町区の規則一部改正によって23班と24班とが追加された。子供会の班がこのときに増やされたのかどうかについては記録が無く、聞き取りも得られなかった。
1993年度から建部子供会への区からの補助金は5万円に増額された。また、青年会への補助も予算が2.5万円から3万円になったが、婦人会2万円と老人会2万円は変化がなかった。
- 4) 「緑の募金活動」の主催者は、石川県緑化推進委員会である。
- 5) 「県民みどりの祭典」の主催者は石川県庁の森林管理課森林企画係で、「緑の少年団」は催物に参加する側である。